

地域づくり、活性化を支える高齢者

<ポイント>

- ・市民活動グループのまちづくりの取り組みの中で、高齢者が、来訪者（観光客）に自らの経験や知識を提供する「館長」となっている。
- ・高齢者は、サポートをほとんど受けることなく、自主的に来訪者との対応を行っている。

<高齢者がかかわる事業の概要>

三重県伊勢市で、平成元年以来、草の根レベルで地域の活性化に取り組んでいる「ザ・伊勢講」は、全国から会員を募集し、伊勢の物産や情報を届けたり手作りツアーに招待するといった活動からスタートした。その後、ボランティアガイドの育成や彼らの活躍の機会となるツアーを民間企業とのタイアップで実施するなどの活動を展開。高齢者が活躍する「まちかど博物館運動」は、そうした取り組みの中で見つけだされた、「隠れた地域の魅力」を観光資源、地域活性化の資源として活用したまちづくりへの志向の高まりを背景としている。

この運動は、民間シンクタンクの取り組みなどと連携し、市民参加型、町とそこに住む人々を元気づけること、をコンセプトにしスタートを切った。その中では、個人の趣味であつめた品々、伊勢の風土にねざした伝統工芸や商家の收藏品、新たな取り組みに挑戦する地場産品、歴史や文化を反映した建物などが資源として注目され、それらを公開することができる個人宅や商店等がまちかど博物館として認定された。平成4年には、マスコミを使ったPRも行われ、30近いまちかど博物館が一般公開されることになった。



まちかど博物館のもうひとつのコンセプトは、その居住者が「館長」となり、来訪者にコレクションや家業の案内をするというように、ヒトとモノをセットで地域活性化の資源と捉えるところにある。ザ・伊勢講からのそれぞれのまちかど博物館への支援は、看板とガイドブックの配布、時折行われるまちかど博物館ツアー程度で、コレクションや収蔵品などの公開のしかた、来訪者との対応など、基本的には、すべて館長個人の判断と努力にゆだねられている。

< 高齢者が担う役割 >

ガイドブックには、それぞれのまちかど博物館の開館時間や予約の要不要などの情報が掲載されている。「館長」(高齢者)は、ガイドブックを片手に訪れた観光客に家業の紹介や収蔵品、趣味で集めた品々の解説などを行っている。

また、町歩きを楽しみながらぶらりと訪れる来訪者も少なくない。館長は、こうした来訪者にも出来る限り対応するなど、まちかど博物館運動を大きく支えている。

< 獲得される生きがい >

ここでは、「館長」として活躍する高齢者の声や様子を通して、どのように生きがいが獲得されているのかに触れてみたい。

和具屋の館長である大西とよのさんは、85 才とは思えない若々しさと上品な伊勢言葉で、「週末は全部埋まっている」というほどの多くの来訪者に、家業の瀬戸物を紹介したり、200 年を越える蔵(今も現役)を案内している。とよのさんで 17 代目のお内儀という和具屋の歴史を今に伝える陶器や蔵の造りの合間に、「瀬戸物でも荷は全部船だった」「陸送になったのは終戦後、その前は河岸が荷船でにぎわっていた」などと和具屋のあるかつての商業地区の今昔を教えてくれる。

来訪者の反応を注意深く見定め、あまり興味がなさそうな人には、蔵に荷物を運ぶときに使ったトロッコのレールあたりをさらりと紹介。来訪者が興味を持てば、伊勢神宮の御師の家でもあったことから残されて



いる江戸時代の本（旅行ガイドブック風のものや辞典風のもの）や錦絵、とよのさんが使ったという明治期の教科書、家業の盛況ぶりを彷彿とさせる収入印紙や屋号と注文の文章が彫られた版木、豪傑だったというひいおばあさんも使っていた香水をつくるランビキ、陶器の便器（へっつい）や水車など、次々に地域やお宅の時の流れを彩るモノと話を紹介してくれる。

テレビで放送されるような立派なものはない、庶民のものしか残っていない、としながらも「かえってその方がいいんとちがうか」「皆さんに見てもらえるだけでもいいんとちがいますか」と語るとよのさんの笑顔には、多くの来訪者に、他では味わえない体験を提供していることへの確信が込められているようだった。

伊勢電山田西口駅記念室は、館長の松月清二さんの自宅。かつてそこに同名の駅があったことから、清二さんが「もともと駅であったという何かを残していかなければ」と開設した。たまたま駅の跡に住んでいるから伊勢電に興味を持ったというが、記念室の壁面には、ずらりと収集した関連書籍やなつかしい写真が置かれている。その幾つかは清二さんの取り組みを応援している息子さんからのプレゼントだ。

また、記念室は、駄菓子屋をかねているが、これも自宅をまちかど博物館として公開するようになってからのことだ。そこには、子ども達が「郷土に関心を持つ小さなきっかけになれば」という思いがあるという。ちなみに、清二さんは、まちかど博物館をきっかけに、学校に招かれ子ども達に伊勢電や郷土の歴史の話をするようになったという。観光地から離れているからあまり人はこないと言いながらも、清二さんは、若くして亡くなった息子さんの記録に載っていたと尋ねてきた方との交流が今でも続いていることなどを教えてくれた。

< 生きがいの獲得を支える仕組み >

最後に、館長（高齢者）達が、上記したような生きがいを獲得することを支えている仕組みについて、振り返ってみたい。

既に述べたように、ザ・伊勢講が、それぞれのまちかど博物館の運営などを館長に任せていることに注目したい。そのために、館長は、自由に、無理のないペースで、経験や知恵を来訪者に伝えることができる。だからこそ、息長く、経験や知恵が役立っていることを実感しつづけることができると言えよう。